

アンドロギュヌスを求めて ——Tennessee Williams の両性具有願望——

山 本 秀 行

これまで、この世の中で、両性具有 (androgyne) という考えに魅せられ、それを追い求めた者は少なくない。何故、この考えはそれ程までに彼らを惹き付けたのであろうか。

両性具有という考え方の起源は、古くは遠く、プラトン (Plato) にまで遡る。彼はその著書『饗宴』の中で、第三の性としての両性具有について記述している。¹⁾それ以降、このテーマはユング心理学、神話学、文化人類学などといった様々な視点から古今東西の批評家・学者によって論じられてきた。²⁾

特に、文学において、両性具有というテーマは多くの作家によって好んで取り上げられ、恰好の表現対象となっている。試みに、ここで、その代表的な例を僅かではあるが、挙げることにする。フランスではバルザック (Honoré de Balzac, 1799-1850) が『セラフィータ』 (*Séraphita*, 1834) で³⁾、イギリスではヴァージニア・ウルフ (Virginia Woolf, 1882-1941) が『オーランド』 (*Orlando: A Biography*, 1928) で⁴⁾、アメリカでは S F 作家のアーシュラ・K・ルグイン (Urshla K. Le Guin, 1929-) が『闇の左手』 (*The Left Hand of Darkness*, 1978) で⁵⁾、それぞれ両性具有者を描いている。我が国日本でも、谷崎潤一郎 (1886-1965) が『魔術師』 (1916) で両性具有者を描いている。⁶⁾

また、近年になってフェミニズム批評隆盛の折、マーク・スピルカ (Mark Spilka) がヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の両性具有性を論じ⁷⁾、またサリタ・カマー (Surita Kumar) がヘミングウェイ、ドライザー (Theodore Dreiser, 1871-1945)、フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald, 1896-1940) という「失われた世代」 (“the Lost Generation”) の代表的三作家に「性」 (‘gender’) という視点からのアプローチを試みている。⁸⁾ また、ホーベラー (Diane Long Hoeveler) はワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) の作品に作者の両性具有者的姿を見出そうとしている。⁹⁾

今まで、現代アメリカの劇作家テネシー・ウィリアムズ (Tennessee Williams, 1911-83) の作品に両性具有性が潜んでいることを指摘している批評家は少数ではあるが、存在する。¹⁰⁾ しかし、ウィリアムズ自身の両性具有願望についてはあまり論じられたことはない。本論では、テネシー・ウィリアムズの両性具有願望がどのようなものであったか、そして、それが彼の作家としての一面において、どのような意味を持っていたか、考察していくことにする。

1. ウィリアムズの両性具有願望

Androgyne, mon amour,
brochette de coeur was plat du jour,
 (heart lifted on a metal skewer,
 encore saignante et palpitante)
where I dined au solitaire,
table intime, one rose vase,
 lighted dimly, wildly gay,
as, punctually, across the bay
mist advanced its pompe funebre,
its coolly silvered drift of gray,
 nightly requiem performed for
mourners who have slipped away...

Well, that's it, the evening scene,
mon amour, Androgyne.¹¹⁾

先に引用したのは、ウィリアムズの「アンドロジン、私の恋人」(“Androgyne, Mon Amour,” 1976) という、作者が現在の自分の姿と比べ合わせて、人間の理想型としての両性具有者を讃えた詩である。このような詩を彼に書かせる程の並々ならぬ情熱が、両性具有というテーマには潜んでいたのであろう。

ウィリアムズの作品の中には、前掲の「アンドロジン、私の恋人」のように直接的に両性具有を扱っていないものの、両性具有を暗示していると考えられる作品がある。例えば、『叫び』(Out Cry, 1971) 及び、その改訂版『二人だけの劇』(The Two-Character Play, 1973) では、二人だけの登場人物である兄フェリス(Felice)と妹クレア(Clare)が、まるでプラトンが描くところの、引き裂かれた両性具有者の片割れ同士がお互いを求め合うかのようにお互いを求め合い、最後には二人は和解し、お互いを許し合い、そして暗闇の中で一つになる。¹²⁾

また、ウィリアムズは、作家にとって性別など、あまり重要なことではなく、彼自身は作品中の登場人物が女性であろうと男性であろうと同じように、それに自己を投影して描くことができると言っている。

Anyway, I don't think the sexuality of writers is all that interesting. It has no effect. I can tell you that. In very few instances does it have any effect on their ability to portray either sex. I am able to write of men as well as

women, and always project myself through whichever sex I'm writing about.¹³⁾

ウィリアムズは、自分の作品の中で密かに両性具有願望を表現するだけでなく、自分の両性具有願望について以下のように直接的に明言している。

But I'm not a typical homosexual. I can identify completely with Blanche—we are both hysterics—with Alma and even with Stanley, though I did have trouble with some of the butch characters. If you understand schizophrenics, I'm not really a *dual* creature; but I can understand the tenderness of women and the lust and libido of the male, which are, unfortunately, too seldom combined in women. That's why I seek out the androgynous, so I can get both.¹⁴⁾

この引用中、作者が作品の中で男性にも女性にも自分を「同化する」(“identify”) ことができることが述べられている。また、ウィリアムズは自分のことを「典型的な同性愛者」(“a typical homosexual”) として認識しておらず、むしろ、彼は男性も女性も兼ね備えた「両性具有者」(“the androgynous”) を探し求めていることが明らかにされている。このように、彼は、自分の同性愛的性質を根本的に否定するための「言い訳」として、両性具有願望を持ち出しているように見える。ここに、彼の両性具有願望の本質を探る、一つの手がかりがあるように思われる。つまり、彼の両性具有願望を本質的に捉えるためには、まず、彼の同性愛的性質について検討する必要がある。

次の章では、ウィリアムズの同性愛的性質の成り立ちを、彼の人生と関連させながら考察していくことにする。

II. ウィリアムズの同性愛的性質の成立

通説では人間の人格形成上、最も重要な時期の一つとされている幼年期のかなりの部分をウィリアムズはミシシッピ州 (Mississippi) の田舎にある、母方の実家で過した。製靴会社に勤め、その会社で地方回りのセールスマンをしていた父コーネリアス (Cornelius) は、仕事の関係で家には不在がちであった。そのため、ウィリアムズの家庭は米国監督派 (Episcopalian) の牧師の祖父ウォルター・エドウィン・ディキン (Walter Edwin Dakin) と本人、そして、その弟ディキン (Dakin Williams) を除けば、祖母ローズ・O・ディキン (Rose O. Dakin), 母エドウィナ (Edwina Williams), 姉ローズ (Rose Isabel Williams), それに黒人女性の使用人オジー (Ozzie) という、女性の多い家庭であった。その上、祖母のローズ・O・ディキンは結婚当初、祖父がまだ、牧師になる前には女手一つで家計を切り盛りしていた程、生活力に富

んだ、強い女性であり、また、母エドウィナも音楽的才能と美貌に恵まれた活発な女性であった。特に、祖母ローズの家庭内での力は他の者を凌駕する程であった。このように、ウィリアムズが幼年期を過した家庭は、紛れもなく、祖母ローズと母エドウィナという、二人の女性を中心にした圧倒的に女性優位の家庭であった。¹⁵⁾この家庭環境が、彼の性格に何らかの影響を及ぼさなかったとは考え難い。すなわち、幼年期において強い女性ばかり見て育ったために、彼が女性に対して、普通とは違った女性観を持つようになったと容易に推測できる。また、彼が成長してから後も、女性を強く恐ろしいものと考えていたとすれば、彼が女性に対して普通の男性が持つような愛情を持たず、その反動として、同性愛に走ってしまったのも納得がいく。

そんな強い女性の中で、唯一、極度に気が弱く、内向的な姉ローズに対して、ウィリアムズが並々ならない愛情を寄せたのは無理もなかったろう。そのみならず、1937年に、彼女は既往症の精神疾患を悪化させてしまったために、その当時、実験段階にあって、極めて危険性の高い脳葉切開手術 (lobotomy) を彼の知らぬ間に、母エドウィナの一言で受けさせられてしまった。それ以降、ローズは、自分の意思を積極的に持つことができなくなってしまい、精神的に廃人同様の生活を送ることを余儀なくされる。この事件は自分の力が及ばなかったために起こってしまったという考えが、ウィリアムズの精神に傷 (trauma) を残し、それ以後の彼の人生に、耐え難い程の無力感と共に、暗い影を落とすことになる。この姉ローズの存在も、彼の女性観を普通のものとは違ったものに変えてしまった大きな要因になっていることは間違いないだろう。

また、ローズの脳葉切開手術とほぼ同時期に、ウィリアムズの身に、さらに、ある重大な出来事が起こる。それは、彼が幼なじみのヘイゼル・クラマー (Hazel Kramer) に生まれて初めて (結果的には彼の人生の中で最後でもある) 異性に対して恋愛感情を抱き始めた矢先に、突然、彼女が結婚してしまう。その当時、ミズーリ大学 (Missouri Univ.) に入学したばかりだった、彼はおそらく、ただ為す術も無く、彼女に裏切られたという感情によって、失意のどん底に叩き付けられ、それ以降、女性に対して少しの愛情を抱くことさえ、無くなってしまう。普通であれば、異性との恋愛に喜びや痛みを知り、言わば、それをさらなる充実した恋愛への道標とするべき時期に彼は大きな精神的な打撃を受け、それ以後、異性との恋愛への窓を自ら閉ざしてしまったのである。

その二つの挫折的な事件の後に来るものこそ、ウィリアムズが経験した初めての同性愛体験であった。そのいきさつについて、彼は『回想録』 (*Memoirs*, 1975) の中で、度々、息せき切った熱い調子で赤裸々に語っている。¹⁶⁾それによると、大学の男子学生友愛会館 (fraternity house) で同僚の学生に無理やり、同性愛の関係を結ぶことを迫られたのがその始まりとされている。

初めての同性愛体験を経た後、ウィリアムズは何人かの男性と関係を持つことになる。その中でも彼の生涯に大きな影響を与えた、二人の同性愛の恋人が存在する。そのうちの一人は1940年代前半、彼が30歳前後の頃に付き合っていた、キップ (Kip=「伴侶」という意味) と呼ばれる青年である。数年間の交際の後、キップは脳腫瘍のために若くして、この世を去る。彼の死

が、ウィリアムズに大きな衝撃を与えたのは確かであるが、彼はそれまで以上に創作に打ち込むことや、代りの相手を捜し出すことで、何とか、その苦境を乗り越えることができた。

その後、1940年代後半に、十数年間の長きにわたって、ウィリアムズの心の支えとなった、一人の同性愛の恋人と知り合う。それが、もう一人のウィリアムズの重要な同性愛の恋人、フランク・マーロ (Frank Merlo) という青年である。彼はウィリアムズにとってキップ以上に、大事な存在であった。そのため、1963年、フランク・マーロが病死した後、そのショックのために、自ら「泥酔の時代」と呼ぶ、酒と麻薬に浸り切り、創作さえもままならない、彼にとって苦難に満ちた時期が始まることになる。その状態から、ウィリアムズが抜け出すには、精神病院への強制入院はもとより、カトリック改宗というような、ありとあらゆる必死の努力が必要であった。

フランク・マーロの死後、ウィリアムズに同性愛の体験が全く無かったか、どうかは疑問だが、それ以降、それまで程の熱意をあまり、同性愛に見せなくなったことは事実である。

この章では、ウィリアムズの同性愛的性質が、どのように形成されていったか、主に、彼の家庭環境から考察してみた。そして、彼が辿った同性愛体験の遍歴について『回想録』をもとにして探ってみた。前述のように、この同性愛的性質と彼の両性具有願望とは何らかの密接な関係があるように思われる。次の章では、彼の同性愛的性質と両性具有願望の関係を考察し、彼の両性具有願望の本質を読み解くことにしたい。

Ⅲ. ウィリアムズの同性愛的性質と両性具有願望の関係

前の章で考察したように、ウィリアムズは同性愛的性質を持ち、私生活では一時期、そのような体験にどっぷりと浸かり切っていた。しかしながら、不思議なことに、『回想録』出版以前、彼は自分の同性愛的性質にあまり触れようとはしなかったし、また、自分の作品の中で同性愛を積極的に取り扱おうとはしなかった。

I never found it to deal with it [homosexuality] in my work. It was never a preoccupation of mine, except in my intimate, private life.¹⁷⁾

この発言では、たとえ、私生活では同性愛に耽溺していても、自分の作品にはそれを決して表現したくないという、ウィリアムズの頑な姿勢が読み取れる。

では、なぜウィリアムズは自分の作品の中で、同性愛を取り扱おうとはしなかったのか。彼の同性愛的性質と両性具有願望の関係を考える前に、まず、この問題を考えていくことにしたい。

まず、その理由として、第一にウィリアムズが作品を書く際の社会的な制約が想定される。彼が精力的に執筆活動を続けていた1960代までは、同性愛者が社会的な地位を得ることはおろ

か、社会的認知さえされる状況ではなかった。アメリカにおいて、その状況が、「同性愛者解放運動」(“Gay Liberation Movement”)とでも呼ぶべき、草の根運動を通して、穏やかではあるが着実な変化を遂げていくのが、1970年代である。¹⁸⁾その時期にちょうど符合するように、1975年、ウィリアムズの赤裸々な同性愛体験を綴った『回想録』が出版された。そして、あまりに衝撃的に同性愛が描かれているために作者の希望により、それまで1,500部の限定出版であった、彼の短編小説「欲望と黒人マッサージ師」(“Desire and the Black Masseur,” 1948)が公に出版されたのは、ようやく1980年になってからのことである。¹⁹⁾また、1981年のインタビューにおいてさえ、彼は、「……公然と同性愛者であろうとすることはまた、依然として危険なことである。」(“...it's also still dangerous to be openly homosexual.”)と、自ら同性愛者であることを公言することに危険を感じ、そのことに対して消極的な見解を述べている。²⁰⁾

このように、1970年代以前、ウィリアムズが自分の同性愛的性質を作品中に表現することは当時の社会的な制約によって困難であったに違いない。同性愛を作品中に直接的に描くことはもちろん、彼が自分自身を同性愛者であると公言することさえ、作家としての創作活動に重大な支障をきたしかねない状況だったのである。また、たとえ、彼の同性愛的性質が無意識的に作品中に表現されることがあっても、読者が気付かないような、抑圧された形で表現されていたのであろう。²¹⁾

ウィリアムズが作品の中で自分の同性愛的性質を取り扱わなかった、第二の理由として、彼が持っていた強烈な芸術家意識が想定される。彼は創作に自己の存在理由を見出し、創作に普通の作家以上に情熱を持って臨んでいた。どんなときにも必ず、起きてからの数時間はタイプライターの前で執筆に勤み、自分にとって執筆は「一種の精神療法」(“a kind of psychotherapy”)とまで考えていた。²²⁾彼の作品の中に、芸術のために自分の人生を犠牲にすることさえも厭わない芸術家の姿が度々、描かれている。²³⁾我々が、その芸術家の姿を作者ウィリアムズの姿に重ね合わせて見ることは避け難い。

「詩人の仕事(作品)は詩人の人生であり」(“the work of a poet is the life of a poet”), 「詩人の人生は詩人の仕事(作品)である」(“the life of a poet is the work of a poet”)と、『去年の夏、突然に』(*Suddenly Last Summer*, 1958)の詩人セバスチャン(Sebastian Venable)について、その母ベナブル夫人(Mrs. Venable)が言うように²⁴⁾、まさしく、作者ウィリアムズにとっても、芸術家の人生と仕事(作品)は切っても切れない不可分の関係にあったのである。彼にとって仕事(作品)の重要性は、「作品!!—あらゆる四文字語の中で最も素晴らしい言葉、多くの場合は愛(love)の重みにもまさる。」(“Work!!—the loveliest of all four-letter words, surpassing even the importance of love, most times.”)とまで²⁵⁾、彼が言う程、極めて高いものである。

「作品＝作者の人生」という考えを持っていたウィリアムズであればこそ、自分の人生における暗い部分(＝同性愛的性質)を作品に描くことを好まなかったはずである。それゆえ、彼は自分の作品中で、自分の人生における暗い部分を極力、排除しようとしたと考えられる。つ

まり、意図的に作品にプライオリティを置くことによって、彼は自分の人生の暗い部分を払拭し、全く現実の人生とは異なった「人生」を作品の中に（あるいは作品として）創造しようとしたのであろう。

以上、ウィリアムズが、自分の同性愛的性質を作品の中で取り扱わなかった理由を二つ、想定してみた。それらは、一つが彼が作品を執筆する際の社会的な制約、もう一つが彼の強烈な芸術家意識であった。

当然、ウィリアムズが、前述の二つの理由によって、自分の同性愛的性質を作品で取り扱うことができなかったこと（あるいは意図的に取り扱おうとしなかったこと）は、芸術家にとっては「作品＝作者の人生」であるという考えを持っていた、彼にとって大変な苦しみであったろう。何としても、自分の人生を作品の中で昇華したい、そんな彼の切実な欲求が彼の両性具有願望へとつながっていったのではあるまいか。²⁶⁾そのような意味で、神話的な存在として、あるいは人間の理想型として、古くから多くの芸術家によって芸術作品の題材として取り扱われてきた両性具有者は、作者ウィリアムズにとって、うってつけの存在であったに違いない。

また、ウィリアムズは、自分が「両性具有者の男性」(“androgynous male”)を求めていることを告白している。²⁷⁾このことから、自分の同性愛的性質を両性具有という「衣」で覆い隠そうという彼の意図が窺い取れる。あるいは、ある意味で、彼は自分の同性愛的性質を両性具有という神話的な存在を求める願望に仕立て上げ、社会規範と自らの欲望の間に揺れる精神的な葛藤を克服しようとしているかのようにも見える。彼が持っていた欲望が同性愛ではなく、神話的な両性具有に憧れる気持ちであったとすれば、それは太古の人間の原型に回帰しようという、人間誰しも、無意識のうちに抱いている普遍的な願望という自己正当化が可能となる。そのような自己正当化をすることによって初めて、精神的な葛藤を克服することが、彼にとって容易になるのである。

すなわち、ウィリアムズは自分の人生における暗い部分である同性愛的性質を、両性具有願望というものに昇華することによって、暗い色に彩られた自分の人生自体をも、作品同様に美しいものにしようとし、同時に自らの精神的な葛藤を克服しようとしたのである。

我々が、ウィリアムズの「作品＝人生」を読むとき（あるいは劇として見るとき）、その中に彼が残した、両性具有願望の影を決して見逃してはならない。その影こそ、「作品＝人生」というエクリチュールに浮かんでは消えていく、作者の語られざる「真実」の姿に他ならないのだから。

[注]

- 1) プラトン、山本光雄訳『饗宴』『プラトン全集』第三巻（東京、角川書店、1973年）、179-85頁を参照。
- 2) ユング心理学から両性具有を取り扱っているものとして、J・シンガー、藤瀬恭子訳『男女両性具有——性意識の新しい理論を求めて』I・II（東京、人文書院、1976年）[June Singer, *Androgyny: Toward*

a New Theory of Sexuality (New York: Doubleday, 1976)], 神話学から両性具有を取り扱っているものとして、エレミール・ゾラ、川村邦光訳『アンドロギュヌスの神話』(東京、平凡社、1988年)、文化人類学から両性具有を取り扱っているものとして、ミルチャ・エリアーデ、宮治昭訳『悪魔と両性具有』エリアーデ著作集第六巻(東京、せりか書房、1985年)がある。また、日本では、澁澤龍彦氏が両性具有に関する卓越した論考を数多く残しており、筆者が本論を書く上で、非常に多大なインスピレーションを与えてくれた。その代表的なものは、澁澤龍彦「アンドロギュヌスについて」『夢の宇宙誌——コスモグラフィカ・ファンタスティカ』(東京、美術出版社、1964年)である。その他、芸術における両性具有を日本人の学者が扱った論文として、次のようなものがある。由良君美「ヘルマフロディトスの詩学」及び、川村錠一郎「ヘルマフロディトスの生と死」、澁澤龍彦編『エロティズム』(東京、青土社、1982年)、大橋建三郎「文学における「愛」の主題(9)——アンドロギュヌス——「愛」と「知」」、『英語青年』第百三十六巻、三号(東京、研究社、1990年6月)、松田修「幕末のアンドロギュヌスたち——馬琴論の試み」『華文字の死想』(東京、ベヨトル工房、1988年)がある。また、『幻想文学』第三十一号、特集「アンドロギュヌス——両性具有の妖しい夢」(東京、幻想文学出版局、1991年2月)は両性具有研究の入門書として役に立つ。

- 3) H・ド・バルザック、沢崎浩平訳『セラフィタ』(東京、国書刊行会、1976年)。この作品を題材にロラン・バルト(Roland Barthes)は見事な構造分析を行っている。Cf. ロラン・バルト、沢崎浩平訳『S/Z——バルザック『サラジヌ』の構造分析』(東京、みすず書房、1973年)。
- 4) Virginia Woolf, *Orlando: A Biography* (London: Hogarth Press, 1928).
- 5) アーシュラ・K・ル・グィン、小尾美佐訳『闇の左手』早川文庫(東京、早川書房、1978年)。
- 6) 谷崎潤一郎「魔術師」『谷崎潤一郎全集』第四巻(東京、中央公論社、1967年)。この他にも、「性」の取り換えがテーマとなっている、両性具有指向の作品として、作者未詳の異色の王朝物語『とりかえばや物語』がある。桑原博史訳注『とりかえばや物語 全訳注』(一)～(四)講談社学術文庫(東京、講談社、1978-79年)。その作品についてユング心理学的見地から河合隼雄氏が優れた分析を行っている。河合隼雄『とりかえばや男と女』(東京、新潮社、1991年)。
- 7) Mark Spilka, *Hemingway's Quarrel with Androgyny* (Lincoln, Nebr.: U of Nebraska Press, 1988).
- 8) Sukita Paul Kumar, *Man, Woman and Androgyny* (New Delhi: Indus Publishing Company, 1989).
- 9) Diane Long Hoeveler, *Romantic Androgyny: The Women Within* (University Park, Penn.: The Pennsylvania State UP, 1990).
- 10) 例えば、ビッグズビー(C.W.E. Bigsby)が『叫び』における両性具有性を指摘している。Cf. C.W.E. Bigsby, "Valedictory" in Harold Bloom ed., *Tennessee Williams Modern Critical Views* (New Haven, Conn.: Chelsea House Publishers, 1987), pp. 133-35.
- 11) Tennessee Williams, "Androgyne, Mon Amour" in *Androgyne, Mon Amour* (New York: New Directions, 1977), p. 16.
- 12) *Out Cry* (New York: New Directions, 1973). *The Two-Character Play in The Theatre of Tennessee Williams* Vol. 5 (New York: New Directions, 1976). 以下、同シリーズを *The Theatre* と表す。

- 13) Alvert J. Devlin ed., *Conversations with Tennessee Williams* (Jackson, Miss.: UP of Mississippi, 1986), p. 344.
- 14) Ibid., pp. 228-29.
- 15) ウィリアムズの母方の実家の家庭環境については、次の文献に詳しい記述がある。Cf. Donald Spoto, *The Kindness of Strangers: The Life of Tennessee Williams* (Tronto: Little, Brown and Company, 1985), pp. 9-15. D・ウィリアズ, S・ミード, 奥村透訳『テネシー・ウィリアムズ評伝』(東京, 山口書店, 1988年) [Dakin Williams and Sheperd Mead, *Tennessee Williams: An Intimate Biography* (New York: Arbor House, 1983)], 5-12頁。また, ウィリアムズの伝記的背景を知る上で, 前掲の二点の他に次の文献を参考にした。Tennessee Williams, *Memoirs* (Garden City, N. Y.: Doubleday, 1983). Dotson Rader, *Tennessee: Cry of the Heart* (Jackson, Miss.: UP of Mississippi, 1986). 石塚浩司『ウィリアムズ——暗がりの詩人』(東京, 冬樹社, 1985年)。現代演劇研究会編『現代演劇』第2号, 特集テネシー・ウィリアムズ(東京, 英潮社, 1979年10月)。
- 16) Williams, *Memoirs*, pp. 28-33, pp. 45-49.
- 17) Devlin ed., *Conversations*, p. 344.
- 18) 「同性愛者解放運動」については次に挙げる文献の該当箇所を参照のこと。David F. Greenberg, *The Construction of Homosexuality* (Chicago: U of Chicago Press, 1988), pp. 455-81. また, 1973年に米国精神医学協会評議委員会(The Board of Trustees of the American Psychiatric Association)が出した『精神疾患に関する診察統計便覧』(*Diagnostic and Statistical Manual of Psychiatric Disorders*)から, 同性愛が削除されたことは, 1970年代の同性愛についての社会的認識の変化を表す象徴的な事象と言えよう。Cf. Ronald Bayer, *Homosexuality and American Psychiatry: The Politics of Diagnosis* (Princeton, N. J.: Princeton UP, 1987), pp. 3-5.
- 19) “Desire and the Black Masseur” in *Tennessee Williams Collected Stories* (New York: Ballantine Books, 1986). この作品の出版の経緯に関しては次に挙げる文献の該当箇所を参照のこと。Dennis Vannatta, *Tennessee Williams: A Study of the Short Fiction* (Boston: Twayne, 1988), pp. 48-50.
- 20) Devlin ed., *Conversations*, p. 344.
- 21) 同性愛作家としてのウィリアムズに重きを置こうとする, マーク・リリー(Mark Lily)は『ガラスの動物園』(*The Glass Menagerie*, 1944)や『欲望という名の電車』(*A Streetcar Named Desire*, 1947)という初期作品にさえ, 作者の同性愛的性質が隠されているとしている。Cf. Mark Lily, “Tennessee Williams: *The Glass Menagerie* and *A Streetcar Named Desire*” in Mark Lily ed., *Lesbian and Gay Writing* (London: Macmillan, 1990). *The Glass Menagerie* and *A Streetcar Named Desire* in *The Theatre* Vol. 1 (New York: New Directions, 1971).
- 22) “The World I Live in” in *Where I live: Selected Essays* (New York: New Directions, 1978), p. 89.
- 23) 例えば, 『イグアナの夜』(*The Night of the Iguana*, 1961)のジョナサン・コフィン(Jonathan Coffin), 『東京のホテルのバーにて』(*In the Bar of a Tokyo Hotel*, 1969)のミリアム(Miriam)などは, 芸術至上主義の芸術家として描かれている。*The Night of the Iguana* in *The Theatre* Vol. 4 (New York: New Directions, 1972). *In the Bar of a Tokyo Hotel* in *The Theatre* Vol. 7 (New York: New

Directions, 1970).

24) *Suddenly Last Summer* in *The Theatre* Vol. 3 (New York: New Directions, 1971), p. 352.

25) Williams, *Memoirs*, p. 241.

26) 同性愛と両性具有願望は密接な関係にあり、両者間に明確な境界線を設けることは難しいと思われる。

今村楯夫氏は、文学において両性具有が顕在化する可能性として、近親相姦的世界と同性愛的世界の二つを挙げている。今村楯夫『ヘミングウェイと猫と女たち』新潮選書(東京, 新潮社, 1990年), 200頁。

その他、同性愛と両性具有願望の密接な関係については、次に挙げる文献を参照のこと。Cf. 渡辺恒夫『脱男性の時代——アンドロジナスをめざす文明学』(東京, 勁草書房, 1986年)。渡辺恒夫『トランス・ジェンダーの文化——異世界へ越境する知』(東京, 勁草書房, 1989年)。秋山さとし「両性具有と性倒錯」、『イマーゴ』第二号(東京, 青土社, 1990年2月)。また、ウィリアムズに服装倒錯(transvestism)的傾向があったかは、定かではないが、あるときウィリアムズが、嬉々として女装をしたという、彼の服装倒錯的指向を匂わせるエピソードを、その写真と共にラダーが紹介している。Cf. Rader, *Tennessee: Cry of the Heart*, p. 231.

27) Devlin ed., *Conversations*, p. 229.

(平成3年9月13日受理)